

クールな女上司は、二人きりの残業で年下の俺に 墮とされる――秘密の社内恋愛――

職場では完璧で隙のない美人課長が、夜だけ年下部下に主導権を奪われ女の顔になる

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

社内の誰もが、桐原^{きりはら}怜子^{れいこ}を「氷の課長」と呼ぶ。

企画部の、いつも完璧で、隙がなくて、誰にも甘えない美しい上司。

——その人が今、俺の腕の中で、別人みたいに息を乱している。

出張先のホテルの一室は、間接照明だけが灯っていた。窓の外には見知らぬ街の夜景が広がって、車の流れが川のように光っている。明日の朝には、二人はまた同じ会議室で、上司と部下の顔をして並ぶだろう。けれど今この時間、この部屋で何が起きているか、知る者は誰もいない。

昼間の怜子を思い浮かべる。部下の甘い見積もりを一言で切り捨て、取引先の無理難題を涼しい顔でいなし、誰の前でも背筋を伸ばして立っている女性。社内の人間が口を揃えて「あの人には隙がない」と言う、あの冷たく整った横顔^{よこがお}。

その同じ唇が、今は俺の名前だけを、とろけるように呼んでいる。

「……直人」

ベッドの上、二人ぶんの体温だけが満ちた狭がり、怜子がこちらを見上げた。いつもきつちりとまとめている黒髪はほどけ、白い首筋や枕の上に幾筋も乱れて広がっている。切れ長の涼しい目もととは潤みきつて、職場で見せるあの冷ややかさはどこにもない。

部下を従え、取引先を黙らせ、誰の前でも背筋を伸ばしているあの人が。年下の俺の腕のなかでだけ、すべての鎧を脱ぎ捨てて、頼りなく、甘く、崩れていく。

俺だけが知っている。この人の、表の顔と、裏の顔を。



——ここから先は製品版でお楽しみください——